

筑波花こう岩と旧筑波町の歴史 —筑波花こう岩と人の営み—

長 秋雄¹⁾

1. はじめに

つくば市北条は、天和2年（1626）の常陸北条藩の成立を契機に、筑波地域の政治と経済の中心地として栄えました。土蔵造りの店蔵をはじめとする歴史的建造物とそれらからなる地域特有の町並みを残していました。2011年3月11日東日本大震災時には、100近い土蔵の大半が傷み、10棟以上が倒壊し、毎月1棟以上が取り壊されてきました（2012年5月9日朝日新聞）。この震災から立ち直りかけた矢先、2012年5月6日に竜巻が市街地を通過し、震災以上の甚大な被害が発生しました。

北条の住民や商工会・筑波大学・つくば市でつくる「北条復興まちづくり協議会」は、2012年7月から8月に行った住民アンケート調査に基づき、「筑波山麓の観光拠点としての復興」・「歴史的な町並みを活かした復興」を目指しています。

筆者は、「文化地質学」（その地域に分布する地質資源に依拠して、地域が育ててきた文化・産業などの調査研究）の観点から、筑波山と加波山の周辺に分布する花こう岩と産業・生活・文化との関連を調べ、2007年度つくば市立手代木中学校サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト「花崗岩を通して地域を考える」（長、2008）、地質情報展2011みとでの展示「ふるさとの石 茨城の花こう岩—日本の近代化を築いた石たち—」（長、2012）を行ってきました。そこで、北条の復興を支援するために、北条を含む旧筑波町に分布する筑波花こう岩とそれらを使った歴史的建造物を調べ、2013年7月20日産業技術総合研究所つくばセンター一般公開に「筑波山・加波山の花こう岩と人の営み」を出展しました（長、2013）。

古墳時代の山口2号墳の石室に筑波花こう岩が使われました。奈良時代の中台^{なかだい}廃寺の露盤石に筑波花こう岩が使われました。平安時代には小田の前山の花こう岩に磨崖仏が彫られ、平安末～鎌倉時代とされる日向^{ひゅうが}廃寺の礎石に筑波花こう岩が使われました。鎌倉時代の五輪塔^{ごりんとう}・宝篋印塔^{ほうきょういんとう}・地蔵菩薩立像、江戸時代の鳥居・常夜燈などに、それぞれの地にあった筑波花こう岩が使われました。古代から

の人々の想いが筑波花こう岩に託され千年の時を超えて残されています。

研究学園地区の開発と発展に目を奪われますが、旧筑波町に残る千年を超える自然・歴史・往時の人々の想い（文化財）は、つくば市民が一体となって守り伝えていかなければならないものです。以下、旧筑波町を筑波町と記します。

2. 筑波花こう岩

筑波町には5種類の筑波花こう岩が分布します。それらの分布を口絵1中段の地質図に示します（高橋、2007から抜粋し、地名を加筆）。この地質図では北条の城山^{じょうやま}と漆所^{うるしじよ}の土塔山^{どとうやま}（古墳）が筑波花こう岩4（中粒花こう岩）に分類されていますが、宮崎ほか（1996）による5万分の1地質図「真壁」では、両者は筑波花こう岩5（細粒花こう岩）に分類されています。ここでは、宮崎ほか（1996）にもとづき、それぞれの産状や分布を述べます。

- ・筑波花こう岩1（細粒黒雲母角閃石閃緑岩、中粒黒雲母角閃石トータル岩）

筑波花こう岩3中の捕獲岩として産し、筑波山南山麓の白滝・真壁町桃山及び薬王院から筑波山に至る沢に比較的まとまった分布が見られます。

- ・筑波花こう岩2（片状黒雲母トータル岩）

筑波山西側の真壁町酒寄から椎尾にかけての地域と国松周辺に分布します。明瞭な片状構造（縞状の構造）を持つことが特徴です（口絵1の下段左端写真）。

- ・筑波花こう岩3（斑状黒雲母花崗閃緑岩など）

筑波山の山腹から山麓に広く分布し、表筑波スカイラインから柿岡盆地にかけての筑波変成岩類の分布域（地質図では茶色で表示）に数100m規模の小岩体として散在します。最も広く分布する岩相は斑状黒雲母花崗閃緑岩です。斑状花こう岩は、カリ長石の斑状結晶（長径が数cmから10cm）が特徴です（口絵1の下段左2番目の写真）。他に、斑状白雲母黒雲母花崗閃緑岩・粗粒黒雲母花崗岩・粗粒黒雲母花崗閃緑岩・中粒黒雲母トータル岩の岩相があります。

1) 産総研 地圏資源環境研究部門

キーワード：筑波花こう岩、石造物、筑波町、北条、つくば市、文化地質学

・筑波花こう岩4（中粒白雲母黒雲母花こう岩）
小田の前山，かすみがうら市の大志戸・雪入・上佐谷の山中に分布します。中粒花こう岩の鉱物結晶の大きさは，1 mm～5 mmです（口絵1の下段左3番目写真参照）。

・筑波花こう岩5（細粒花こう岩類）
北条の城山，漆所の土塔山（古墳），国松に分布します。他に，筑波花こう岩3の分布域に径数100 mから1 km程度の小岩体として分布します。細粒花こう岩の鉱物結晶の大きさは1 mm以下です（口絵1の下段の右端写真）。

筑波山の中腹から頂上は，斑れい岩です（地質図では青色で表示）。放射性同位元素比（K-Ar法）による年代測定では，筑波花こう岩は6300万年前～5300万年前に，筑波山の斑れい岩は7500万年前にできました（宮崎ほか，1996）。

3. 筑波町の歴史と地質

筑波町史上巻（筑波町史編纂専門委員会，1989）・筑波町史下巻（筑波町史編纂専門委員会，1990）・つくば市遺跡地図（つくば市教育委員会，2001）などから，筑波町の歴史をたどりながら，それぞれの時代での筑波花こう岩や地質との係わりを見てみましょう。

先土器時代

筑波町での石器採取例はいくつかありますが，確実な先土器時代の遺跡は未発見です（町史上巻 p. 22）。その後の調査で石器の発掘出土事例が増えつつあります。

縄文時代

縄文遺跡は，筑波町のほぼ町内全域に分布しています。その大部分は中期中頃を中心とする縄文土器を出土する遺跡です（町史上巻 p. 39）。

桜川の左岸では，沼田・白井・^{かんごおり}神郡・漆所の山裾に縄文遺跡が分布します（沼田遺跡，白井遺跡，白井十三塚遺跡，白井立野遺跡，白井^{もはぎつ}袈裟津遺跡，白井六所遺跡，神郡遺跡，漆所上ノ台遺跡）。他に，北条中台遺跡，小田田向遺跡があります。

桜川の右岸では，筑波台地の端部に縄文遺跡が分布します（上菅間^{ほらげ}洞下遺跡，洞下^{かのえくぼ}庚 窪遺跡，洞下谷越遺跡，中菅間福王地遺跡，明石遺跡，明石南遺跡）。

約7000年前（縄文前期）の縄文海進期には，筑波町

南端の下大島まで海が入り込んでいました（新藤・前野，1982）。この海進を物語るように，この近くに，桜川流域での上流限である大曾根吹上貝塚があり，その下流約2 kmの右岸に上境旭台貝塚が，左岸に上坂田北部貝塚（土浦市）があります。中世の伝承を伝える「筑波山流記」には，神武天皇の昔この山まで海が来ていたので着波→筑波となったとの一説が書かれています（町史上巻 p. 66）。

弥生時代

筑波町で確認されている弥生遺跡の数は，縄文遺跡の数より少なくなります（町史上巻 p. 53）。桜川の左岸では，神郡条里遺跡，漆所上ノ台遺跡，北条中台遺跡があります。桜川の右岸では，中菅間遺跡，中菅間福王地遺跡，明石遺跡，^{みもり}水守荒神遺跡，水守観音下遺跡，山木舛田遺跡があります。

古墳時代

筑波町には，桜川の左岸に18箇所，右岸に10箇所，合計28箇所の古墳・古墳群があります。最も古い水守の桜塚古墳は，茨城県内他地域の出現期古墳と同じ前方後円墳で，4世紀末とされています。以降は，各古墳群の中心として中規模以上の前方後円墳である山木古墳（5世紀前半），漆所の土塔山古墳（5世紀後半），沼田の八幡塚古墳（6世紀初頭），小和田の^{こわだ かぶとやま}甲山古墳（6世紀前半）が，台地の先端部にあります（町史上巻 p. 76）。漆所の土塔山古墳の後円部は，細粒花こう岩の山塊がそのまま使われました。

6世紀になると町内各地で古墳（円墳や方墳）が造られ，筑波山から宝篋山にかけての山裾部に古墳群が連なっています（町史上巻 p. 76）。山口2号墳の奥壁に大きな細粒花こう岩が使われています。小和田古墳群にある甲山古墳では，2基の箱式石棺が出土し，1号棺には人骨片と鉄製^{ちよくとう}直刀2本が，2号棺から3体の人骨・直刀4本・^{とうす}刀子1本・^{てつぞく}鉄鏃約120本・ガラス勾玉9個などが検出されています（筑波古地域史研究グループ，1981）。

やや遅れて，桜川低地に上大島井戸川古墳群（円墳）・上菅間赤洲古墳（円墳）・中菅間稲荷古墳（円墳）・池田古墳（円墳）・北条大塚古墳（方墳）が造られます。筑波町内での古墳時代の終わりは7世紀中頃です（町史上巻 p. 76）。

筑波町に多数の古墳が存在することは，この地が実り豊かな豊穡（ほうじょう）の地であったことを示しています。秋本（2001）によれば，常陸国風土記は養老末年（723年）までに編纂されたと推定されていますが，常陸風土記の筑波郡の条には，「筑波の山は，人々が行き集い，歌ったり

踊ったりし、また食べたり飲んだりして、今に至るまでそれが絶えないのである」。「諸国の男女は、春の花が咲く時期、安芸の木の葉が色づく時節になると、手をとりあって連れだち、食べ物や飲み物を持って、馬に乗ったり歩いたりして（この山に）登り、終日楽しく遊び過ごす」と書かれています（現代語訳は、秋本（2001）による）。

古代（奈良時代、平安時代）

平沢官衙遺跡は、奈良時代から平安時代の筑波郡の郡衙（役所）跡です。小さな谷を隔てて南西に中台廃寺があります。中台廃寺の露盤石に中粒花こう岩が使われました。今は、その上に道祖神が祀られています（口絵3の上3段中央の写真）。

筑波町内の水田の区画には、古代の条里制（一町四方の方形（約110m×約110m）の区画）の名残が残っています。筑波町教育委員会による試掘調査により、神郡地区の現在耕作している表層の水田は江戸時代以降のもので、古代・中世の水田遺構は逆川の氾濫や漆所台地からの土砂流入で、地下に埋没してしまっていることが分かりました。地下1mの層で中世の陶器片が採取されており、古代の遺構は2mより深い層にあると推察されています（町史上巻 p. 128-130）。

甲山古墳の周溝内の埋土から平安時代の土器と共に鉄滓や羽口が出土し、製鉄タタラ跡と考えられています（筑波古地域史研究グループ、1981）。常陸国風土記の香島郡の条に「若松の浜の鉄を採りて剣を造り」とあることから、常陸国では奈良時代初頭以前にすでに砂鉄製鉄が始まっていました。筑波町でのタタラ製鉄の原材料は「砂鉄が豊富とされる桜川」（筑波古地域史研究グループ、1981）の砂鉄であると考えられます。桜川の砂鉄は、桜川の左岸に広く分布する稲田花こう岩・加波山花こう岩・筑波花こう岩の風化由来物のはずです。

北条の日向廃寺（市指定史跡）は、瓦の型式などから平安時代後葉ないし鎌倉時代初期の築造です（日向遺跡調査団、1981）。上部に造り出し加工がされた礎石は中粒花こう岩でできていて、跡地に展示されています（口絵3の上段左の写真）。

小田の前山にある中粒花こう岩の巨石に磨崖不動明王立像が彫られています。像高は167cmで、像の奥行は頭部で16cm・脚部で8cmと深く彫り込まれています。造立年代は12世紀前半（平安時代末）と推定されています（筑波町文化財保護審議会、1986）。

中世（鎌倉時代、室町時代、戦国時代）

小田城跡（国指定遺跡）は、鎌倉から戦国時代に、常陸国南部に勢力をもった小田氏の居城跡です。小田城跡北東の山裾には、三村山極楽寺遺跡群があります。そのうち、三村山清冷院極楽寺跡は、建長4年（1252）から10年間、奈良西大寺僧忍性（にんしやう）が止まり住み、関東での律宗布教の足がかりとした寺院の跡です（つくば市教育委員会、2010）。筑波町史上巻の巻頭の口絵「三村山想像復元図」に、まさに極楽のような往時の状況が復元されています。

宝篋山山頂にある宝篋印塔（鎌倉中期、茨城県指定文化財）は斑状花こう岩でできていて、山頂付近に分布する斑状花こう岩が使われたと考えられます。極楽寺跡の五輪塔（鎌倉後期、市指定文化財）・山道脇の地藏菩薩立像（鎌倉後期、県指定文化財）・長久寺の石造灯籠（鎌倉後期、県指定文化財）は中粒花こう岩でできていて、小田の前山の中粒花こう岩が使われたと考えられます。

北条の多気太郎義幹之墓（鎌倉時代、口絵3の上段右の写真）は、中粒花こう岩でできています。

八坂神社の五輪塔（天文6年（1537）、県指定文化財、口絵3の上3段右の写真）は、中粒花こう岩でできています。八坂神社別当の吉祥院にあったものが、明治の廃仏毀釈の際に現在地に移されました（現地のつくば市教育委員会案内板より）。

神郡の普門寺の九重層塔（慶長期（1600頃）、県指定文化財、口絵3の下段左の写真）は、斑状花こう岩でできています。

北条の城山（細粒花こう岩の山塊、口絵3の上段中央の写真）の城は、平安時代に平維幹によって作られた「多気山城」であると伝えられてきましたが、戦国時代の末期に、高い動員力を有した組織が純軍事的な理由で短期に築城した城であるとも考えられています（筑波町史編纂委員会、1983a）。

近世（江戸時代）

北条は、元和2年（1616）の領主佐久間勝之の信濃転出により、幕府領となっていました。寛永2年（1625）に旗本堀田正盛領となりました。正盛は、三代将軍徳川家光の乳母春日局の孫でした。正盛は将軍家光の側近として出世を続け、寛永10年（1633）に老中、寛永19年（1642）に下総国佐倉11万石の城主になりました。慶安4年（1651）将軍家光の死に殉死した正盛の遺領のうち常陸国内の5000石を四男の正英が継ぎました。正英は、延宝8年（1680）に筑波・新治・信太の三郡で3000石

加増され、天和元年（1681）には若年寄になりました。正英は、天和2年（1682）にも筑波・新治・真壁郡内の5000石が加増されて1万3000石の大名となり、常陸北条藩が成立しました。元禄元年（1688）に正英が没すると、8000石が幕府に没収されたために、北条藩は廃藩になりました（町史上巻p. 521-523）。

北条藩の存続はわずか6年間でしたが、北条では、陣屋が置かれ、家臣団が住居を構え、武士たちの生活に必要なものを調達する商人が集まることで、小規模ながら城下町らしきものが形成されようとしていました。廃藩以降でも、陣屋は旗本堀田氏や土浦藩に引き継がれ、土浦城付領北端の政治の中心地となりました。そして、筑波地域の農産物の集散地として繁盛することになりました。宝暦9年（1759）の家数は内町95、仲町117、新町65で、「あたかも、一都市のすがたをなす」ほどで、瓦葺の土蔵店が軒を並べました（町史上巻p. 667）。

- ・北条の熊野神社の鳥居（口絵3の上2段左の写真）
寛永13年（1636）に建立され、年号が分かるものでは茨城県内最古級の鳥居です。中粒花こう岩でできています。
- ・筑波のつくば道一の鳥居（口絵2の下2段中央の写真）
宝暦9年（1759）に建立され、斑状花こう岩が使われました。
- ・白井の飯名神社の鳥居（口絵2の下2段左の写真）
建立年不明。斑状花こう岩が使われました。常陸風土記の信太郡に、「飯名の社あり、此は即ち、筑波の岳に有せる飯名の神の別属なり」とあります。平成23年（2011）東日本大震災時に被災しましたが、翌平成24年（2012）に修復されました。
- ・白井の六所皇大神宮の鳥居（口絵2の下2段左の写真）
建立年不明。斑状花こう岩が使われました。六所神社は、以前は筑波山神社の里宮であり、山宮の筑波山神社との間で御座替神事が春と秋に行われていました。明治43年（1910）の神社合祀によって蚕影神社に合祀されました（西海、2012）。
- ・国松の性山寺山門の石碑（口絵3の下段左の写真）
寛政6年（1794）に、中粒花こう岩で造られました。性山寺の常夜燈（口絵2の上2段左の写真）は、片状花こう岩で造られました。
- ・北条のつくば道の道標（口絵2の下段左の写真）
寛政10年（1798）に再建されました。道標の台に斑状花こう岩が使われました。寛永3年（1626）から同10年（1633）にかけて、将軍家光による筑波山諸

御堂の新造・再建が行われ（町史上巻p. 637）、その資材の搬入路として、仲町の中央部から北方向にゆるい坂道が整備され（今の横町）、後に筑波参詣の登山口となりました。

- ・神郡の蚕影神社の鳥居と常夜燈（口絵2の下段中央の写真）
鳥居の建立年不明。常夜燈は文政8年（1825）に奉納されました。ともに斑状花こう岩が使われました。
- ・神郡の普門寺の常夜燈（口絵2の下段右の写真）
弘化3年（1846）に奉納されました。斑状花こう岩が使われました。

明治2年（1870）に、国松村の百姓12人・山守1人・名姓8人・惣代2人・百姓代1人・組頭1人・名主1人と青木庄左衛門が願人となり、当時の若森県役所に「不法難渋願 常州筑波郡国松村」を提出しました。この願では、国松の山中で多数の石屋職人により石の切り出しが行われ、大雨の際に田畑に多くの土砂が押し出すなどの被害があり、2つ沢での石の切り出しの差し止めを求めました（筑波町史編纂委員会、1983b）。石を割るために掘った矢穴跡が残る筑波花こう岩が、今でも国松や白井の山中に残されています（口絵2の上2段中央と右の写真）。

近代から現代（明治・大正・昭和）

筑波鉄道の開通

筑波鉄道の敷設では、明治45年（1912）に真壁町の鉄道期成同盟会が中心となり、新治郡長や土浦町長に働きかけた運動が起こり、以後土浦・北条・筑波・真壁の実行委員らが東京に出て、出資者を募りました。大正7年（1918）に土浦-筑波間が、続いて筑波-真壁間が開通し、翌年に真壁-岩瀬間が開通しました（町史下巻p. 321-322）。

筆頭株主であった浅野総一郎の浅野石材工業株式会社は、明治22年（1889）から真壁町の上小幡で火薬を使った近代的な採石を始めており（真壁町歴史民俗資料館、1996）、筑波鉄道敷設の目的の一つは、真壁町で採石する花こう岩の東京への搬出ルートを短縮することでした。

大正11年（1922）頃の時刻表によれば、上り7本・下り6本の汽車が往復しました。北条から土浦駅へ約40分の行程でした。貨物は、石材を始め、米穀、肥料、酒・醤油、生糸、繭、木材、粉類、瓦土管、石炭、雑貨、水産物等でした。何よりも目玉となったのは筑波山の観光開発で、東京方面からの客足がぐっと増加することになりました（町史下巻p. 323）。

明治42年（1909）当時の小田村「郷土史」には「片麻

岩（筆者注：黒雲母片岩と思われる）ハ山口，平沢ノ特産トシテ建築材トシテ需要多シ」とあり，すでに山口・平沢で採石業が営まれていました。大正7年（1918）の筑波鉄道の開通によって，石類販売量は倍増しました（町史下巻p. 358）。山口や平沢で採れる「平沢石」（黒雲母片岩）は，以前では，古墳の石棺，板碑などに使われていました。著名なものでは，北条の毘沙門天種子碑（鎌倉時代）や小田の三村山不殺生界碑（鎌倉時代）があります。

大正7年（1918）の開通以来この地域の重要な交通・運搬手段であった筑波鉄道ですが，自動車の普及とともに利用者が減少し，昭和62年（1987）3月31日をもって廃線となりました。現在，鉄道路線跡は「つくばりんりんロード」になっています。

新生筑波町の誕生

昭和28年（1953）に町村合併促進法が公布され，北条・筑波・田井・田水山・小田・菅間・作岡の2町5カ村は，昭和29年（1954）からの3年余りの話し合いを通じて，新生筑波町になりました。昭和32年（1957）9月に策定された筑波町新町建設計画では，次の4項目が基本方針となりました。（1）北条を中心に商工業の振興，（2）筑波山観光施設の拡充，（3）桜川流域及び山麓一帯の土地改良と農業生産力の拡充，（4）行財政の充実と町住民の福祉の恒久的向上を期する（町史下巻p. 518-541）。

県立筑波高校の開校

筑波町には，昭和25年（1950）に設立した土浦二高北条分校がありました。その後の中等教育希望者の増加により，筑波町・大穂町・地元住民が新校地・新校舎・付属施設一切の費用を負担して，昭和36年（1961）に茨城県立筑波高等学校に生まれ変わりました。開校時の学校規模は全10学級561名でしたが，昭和55年（1980）には全18学級827名にまで拡充しました（町史下巻p. 595-605）。

研究学園都市の建設と筑波町

筑波研究学園都市の建設は，昭和38年（1963）に閣議決定され，昭和45年（1970）に「筑波研究学園都市建設法」が制定され，昭和50年（1975）になってから諸機関の移転が急増しました。筑波町は学園都市の北端の周辺地域に位置していたために，新都市誕生による直接的な影響は強いものではありませんでしたが（町史下巻p. 618），学園都市は筑波町に大きな影響を与えます。

自家用車の普及による土浦市・下妻市などの筑波町外へ

の購買力の流出は，学園都市中心部への大型店の進出によって加速され，昭和61年（1986）には57%となりました。北条商店街の再開発とともに，土蔵作りの店舗は次第に姿を消しています（町史下巻p. 607）。

昭和63年（1988）に，筑波町はつくば市に編入合併しました。平成2年（1990）に発行された筑波町史下巻の最後の一文は，次のように述べています。「基本構想である『研究学園都市と調和あるまちづくり』は容易に進捗せず，中心部との格差は大きくなるばかりであった。筑波町内の農業・商業等については，既述のように萎縮とも見られるような現象が生じている。産業基盤を整備して地域産業を振興し，自然と歴史につつまれた住みよいまちの建設が課題となっている。」（町史下巻p. 619）

4. おわりに

平成22年（2010）のつくば市役所新庁舎開庁により，北条支所は閉鎖しました。平成25年（2013）3月，山口小学校（児童数8人，全盛期の児童数は約200人）は，北条小学校に統合されて131年の歴史に幕を閉じました。平成25年（2013）4月の筑波高校入学生は126人でした。筑波町史の最後の一文に述べられた課題は，顕著化しており，つくば市民全員が引き継がねばなりません。

旧筑波町地区では，その豊かな自然・歴史的文化財を活かしているさまざまな市民活動が行われています。筆者は同じ市内（研究学園地区）に住みながら，今回の石造物調査の中でそれら市民活動を知ることになりました。北条とのこれからの絆の端緒とするためにそれらを紹介させていただき，本稿をおえます。

自然生クラブ

知的障害者と共に暮らす「自然生クラブ」を1990年に神郡に設立された柳瀬敬さんは，この地を選ばれた理由を次のように述べられています。「又次沢は筑波山の女体山から流れおちる。昭和30年代まで水車がまわり，近隣から米を搗くために馬が上がってきたという。沢水を利用して水車を回していた農家が空き家になっていて，借り受けることができた。驚いたことに，そこにはモノづくりの道具がそっくり残されていたのである。馬具，水車道具，炭焼き窯，養蚕道具，葉タバコの乾燥小屋，味噌樽，醤油甕，そしてさまざまな農具と山仕事の道具など。近代産業社会になってすたれていったものが，まだ生きついていたのである。これが共同体の礎となる。そう直感した私は，うれ

しくなってその場で小躍りしたのである。『自ずから然るべく生きる』ことを旨とし、この活動を自然生(じねんじょ)クラブと名付けた(柳瀬, 2011)。

「自然生クラブ」は、平成13年(2001)に大谷石の米倉を借り受けて田井ミュージアムをオープンし、ここから生まれた「創作田楽舞」は海外で高く評価されています。「自然生クラブ」に、平成21年(2009)度国際交流基金「地球市民賞」が授与されました。

NPO法人小田地域振興協議会

NPO法人小田地域振興協議会(東郷重夫事務局長)は、宝篋山小田休憩所を拠点として、宝篋山に登る登山道を平成15年(2003)から長年にわたって整備してこられています。今では、山口コース1と2、新寺コース、小田城コース、極楽寺コース、常願寺コースがあります。山頂には県指定文化財の宝篋印塔があり、森林浴や筑波山・富士山の眺望を楽しむことができ、年間3万人の人が訪れます。

「みやせいおおくら宮清大蔵」コンサート

北条にある国登録有形文化財「宮清大蔵」は、平成20年(2008)に北条街づくり振興会と筑波大学生の手により内部が改装され、音楽ホールに生まれ変わりました。平成23年(2011)東日本大震災時に被災しましたが、町内唯一の左官屋さんの指導と筑波大学芸術学群の大学生の協力を得て修復されました。平成24年(2012)10月にベルリンフィルの奏者を招いて東日本大震災復興支援チャリティコンサートが、平成25年(2013)6月にはウィーンフィルの奏者・日本の奏者を招いて竜巻被災者支援コンサートが行われました。

NPO法人「やなか もり矢中の杜」守り人

NPO法人「矢中の杜」守り人は平成22年(2010)に設立され、北条に残る近代的和風住宅である旧矢中邸を新たに「矢中の杜」として再生し、その空間を舞台として様々な事業を行うことで「場所づくり、人づくり、まちづくり」に努められています。

乙女のつくば道

「乙女のつくば道」(発行人:ツクバミチコたち)は、北条やつくば道の周りで毎春に行われる、古民家での催し・「矢中の杜」での催し・筑波山神社の御座替祭・筑波山麓わた部の催しなどを素敵なイラストで紹介されています。

追補 2012年5月6日の竜巻被害と復興計画

平成24年(2012)5月6日12時前後に発生した4つの竜巻によって、①茨城県常総市大沢新田からつくば市平沢付近にかけての長さ約17km・幅約500mの範囲に、②栃木県真岡市沖から茂木町・茨城県常陸大宮市秋田にかけての長さ約32km・幅約650mの範囲に、③茨城県筑西市玉戸から桜川市門毛にかけての長さ約21km・幅約600mの範囲に、④福島県大沼郡会津美里町沼田地区から小沢地区にかけての長さ約2km・幅約300mの範囲に、家屋の全壊・損壊、屋根瓦の飛散、窓ガラスの破損、ビニールハウスの倒壊、樹木の幹折れなどの被害をもたらしました(気象庁ほか, 2012)。

つくば市での被害は、死者1人、中傷者5人・軽症者32人、居宅の全壊89棟・大規模半壊38棟・半壊154棟・一部損壊384棟、居宅以外の全壊121棟・大規模半壊12棟・半壊55棟・一部損壊260棟でした(つくば市, 2013)。

竜巻が市街地を通過した北条地区では、被害が特に著しく、居宅の全壊72棟(市内の被害全数に占める割合81%、以下同じ)・大規模半壊31棟(82%)・半壊142棟(92%)・一部損壊296棟(77%)、居宅以外の全壊78棟(64%)・大規模半壊5棟(42%)・半壊34棟(62%)・一部損壊197棟(76%)でした。

北条には昭和戦前までに建てられた歴史的建造物が137棟(この地区の400棟の34%)あり、北条の町並みの特徴のひとつである土蔵造りの建物は店蔵14棟・蔵30棟がありました。137棟のうち被災した建物は85棟(62%)であり、うち2棟(門・付属屋)が全壊しました。これらを除くと、歴史的建造物の主な被害は屋根と開口部の損壊に留まっていました(嶋・安藤, 2013)。

住民や商工会・筑波大学・市でつくる「北条復興まちづくり協議会」は、復興計画を策定するにあたり、2012年7月から8月に住民アンケートを行い、北条在住の全世帯(878世帯)の46%にあたる402世帯から回答を得ました。復興まちづくりの方向性についての問いでは、「筑波山麓の観光拠点として復興」(153世帯)・「歴史的な町並みを活かして復興」(129世帯)が上位でした。歴史的町並みの今後についての問いでは、「古い町並みに戻す」(42世帯)・「残っている所を保存・活用」(199世帯)を望まれる方々が、「現代的な町並みにする」(47世帯)より数多いことが分かりました(嶋・安藤, 2013)。

謝辞

旧筑波町の石造物調査と写真使用では、石造物や寺社を管理されている方々から許可をいただきました。ここに記して皆様への謝意を表します。筑波大学、性山寺、白井区会、筑波山神社、翁照修徳会、普門寺、北条多気本町区会、八坂神社、長久寺、小田中部区会、つくば市教育委員会、杉山吉男氏。

つくば市教育委員会文化財課から調査での助言と本稿への助言をいただきました。記して謝意を表します。

文献

- 秋本吉徳(2001) 常陸国風土記 全訳注. 講談社学術文庫, 東京, 191p.
- 長 秋雄 (2008) つくば市立手代木中学校サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト「花崗岩を通して地域を考える」のねらいと内容. 地質ニュース, no. 643, 32-35.
- 長 秋雄 (2012) 地質情報展 2011 みと ふるさとの石 茨城の花こう岩－日本の近代化を築いた石たち－. GSJ 地質ニュース, 1, 111-114.
- 長 秋雄 (2013) 筑波花こう岩と人の営み－文化地質学による地域振興の試み－. 地圏資源環境研究部門成果報告書 2013 (GREEN REPORT 2013), 58-59.
- 日向遺跡調査団 (1981) 日向遺跡 昭和 54・55 年度発掘調査概要. 筑波町教育委員会, 16p.
- 気象庁・気象研究所・東京管区気象台・仙台管区気象台 (2012) 平成 24 年 5 月 6 日に発生した竜巻について (報告). 報道発表資料平成 24 年 6 月 8 日, <http://www.jma.go.jp/jma/menu/tatsumaki-portal/tyousa-houkoku.pdf> (2013/10/15 確認)
- 真壁町歴史民俗資料館 (1996) 第 62 回企画展 石とくらし－真壁石物語－. 真壁町歴史民俗資料館, 43p.
- 宮崎一博・笹田政克・吉岡敏和 (1996) 真壁地域の地質. 地域地質研究報告(5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 103p.
- 西海賢二 (2012) 改定新版 筑波山と山岳信仰－講集団の成立と展開－. 崙書房出版, 169p.
- 嶋 真史・安藤邦廣 (2013) つくば市北条の歴史的町並みの復興まちづくりに関する基礎的研究－竜巻災害による被害建物の修復の実態と住民意識－. 筑波大学知的コミュニティ基盤センターシンポジウム「大災害における文化遺産の救出と記憶・記録の継承－地域コミュニティの再生のために－」(2013 年 3 月 2 日) 配布資料.
- 新藤静夫・前野元文 (1982) 霞ヶ浦周辺低地の環境地学 (I)－桜川低地と霞ヶ浦の地形, 地質－. 筑波の環境研究, 6, 173-181.
- 高橋裕平 (2007) 筑波山とその周辺の地質ガイド (真岡・真壁・土浦地域地質編集団). 地質標本館.
- 筑波古地域史研究グループ (1981) 筑波古代地域史の研究 昭和 54～56 年度文部省特定研究経費による調査研究概要. 筑波大学歴史・人類学系, 123p.
- 筑波町文化財保護審議会 (1986) 筑波町の文化財 彫刻編. 筑波町教育委員会, 64p.
- 筑波町史編纂委員会 (1983a) 中世城郭遺構調査中間報告書「城山」. 筑波町史編纂委員会, 9p.
- 筑波町史編纂委員会 (1983b) 筑波町史史料集第 7 篇. 筑波町史編纂委員会, 288p.
- 筑波町史編纂専門委員会(1989) 筑波町史上巻. つくば市, 735p.
- 筑波町史編纂専門委員会(1990) 筑波町史下巻. つくば市, 697p.
- つくば市 (2013) 広報つくば (竜巻災害特集), 2013 年 5 月 1 日発行. つくば市.
- つくば市教育委員会 (2001) つくば市遺跡地図. つくば市教育委員会.
- つくば市教育委員会 (2010) 国指定史跡小田城跡. つくば市教育委員会.
- 柳瀬 敬 (2011) 21 世紀のアルカディア－小さい共同体の挑戦－. 自然生クラブ通信, no. 41, 56-58. (CROSS つくば no. 38 (2011.5) から転載)

CHO Akio (2014) Tsukuba granites and stone sculptures in Tsukuba town.

(受付:2013年10月15日)